

生薬ニュース

近畿大学東洋医学研究所附属診療所調剤室

今月のピックアップ

だいおう 大黄

ダイオウとは・・・

ダイオウ : *Rheum palmatum* L. (掌葉大黄)、*R. tanguticum* Maximowicz (唐古特大黄)、*R. officinale* Baillon (薬用大黄) *R. coreanum* Nakai (朝鮮大黄) またはそれらの種間雑種の根茎のことです。通常薬用として日本薬局方に定められている生薬は1種類のことが多いですが、後で述べますが、**ダイオウ**はその特性上4種類がその対象に挙げられます。生薬の中では『瀉下(しゃげ)剤』(=下剤)としてよく知られています。

【性味】 苦、寒

【薬能】 瀉下通便、清熱、活血化瘀、通経

ダイオウの主な成分・・・

ダイオウにはセンノシドという緩下作用を示す成分が含まれています。馴染みのある方もいるかもしれませんが、『センノシド(プルゼニド)』という製剤が医薬品として広く知られています。**ダイオウ**に含まれるセンノシドはそれと同じもので、そのタイプはA~Fまで分類されます。他には、エモジン、アロエエモジン、レインなども含有します。

主な瀉下作用を担うのがセンノシドAで、これは胃腸から吸収されず、大腸で腸内細菌によりレインアンスロンに分解され瀉下作用を示します。この瀉下作用のほかに、清熱(熱のこもりを改善)や活血化瘀(滞留する血液の循環を改善する)などの作用も重要な**ダイオウ**の作用です。



ダイオウの昔話・・・

傷寒論という漢方の原典には、「発汗もしくはこれを下した後・・・」という文章で始まる処方の説明が多数収載されています。体内に侵入した病邪を外へ出すため、発汗と瀉下が基本かつ重要な手段であったことが伺えます。この瀉下を行うのに**ダイオウ**は大きく寄与したと考えられ、感染症などの病の場合でも、“まずは**ダイオウ**を含む方剤で下す”という方法が選択されたと推測できます。

この**ダイオウ**は正倉院御物としても残されており、古来より使用されていたと同時に、国内では生産されていないので貴重な輸入品であったことも想像できます。また、この**ダイオウ**という生薬は、長い時間を経過したものの方が“より良い品”とさ

れる『六陳』と呼ばれる生薬のひとつです（陳は古いという意味）。驚くことに正倉院に貯蔵されていたダイオウでもその薬効が失われていないことが確かめられています。

ダイオウが含まれる方剤・・・

おつじとう

乙字湯（大便が硬くて便秘傾向のあるものの便秘、痔核、切れ痔）

さいこかりゅうこつぼれいとう

柴胡加竜骨牡蛎湯（体力、精神不安、動機、不眠などを伴う神経症、更年期障害、小児夜泣き、便秘）

とうかくじょうきとう






桃核承気湯（体力がありのぼせて便秘がちなものの月経不順、月経困難症、月経時/産後の精神不安）

によしんさん

女神散（体力がありのぼせとめまいがあるものの月経不順、更年期障害、産前産後の神経症）

ダイオウの成分のばらつき・・・

前述しました通り、**ダイオウ**はその基原を4種類のダイオウまたはそれらの種間雑種と規定しており、その根茎にセンノシドAを0.25%以上含むものとしています。植物学的にはその葉の切れ込みの深さで下記のように区別されています。種によって成分含量が定まっていればよいのですが、実際には表の示す通り、センノシド含量は大きくばらついています。実は、Rheum 属は『自家不和合性』といって、花粉がその個体のめしべには受粉されず、他の個体の花粉でないと種子ができない、すなわち、種間雑種を容易に生み出してしまい、種の形質が受け継がれにくいという特性があります。

基原	<i>R. officinale</i>		<i>R. palmatum</i>	<i>R. tanguticum</i>	
葉の形態					
産地	重慶市	四川省中部	四川省中西部	四川省北部	青海省
センノシドA 含量 (%)	0.05-0.19	0.70-1.38	0.39-1.03	0.45-1.59	0.32-0.33



さらに、大半は野生のため生育環境が多様で、また、産地によって加工条件も異なることから、個体のばらつきが非常に大きくなっています。このように**ダイオウ**は品質上の管理が難しい生薬なのです。表の重慶市の**ダイオウ**は規格に合っていないが、その名前が *officinale*（“薬用”の意）となっているのも不思議ですね。